

小田原史談

第286号
発行所 小田原史談会

「いいちみそ」が生まれるまでのお話

多古「加藤兵太郎商店」の歴史



話し手 加藤文子さん

尻餅がご縁

私は昭和二十年(一九四五)戦争の終わりの四月三十日に、十九歳と十ヶ月で嫁いで来たんです。実家は秦野の矢名東海大学付近)の薬師堂の近くですよ。

父が日露戦争に行くまでは造り酒屋だったんですが、そのあと仕事を全部譲って引越しました。

私、兄が三人いましてね、末っ子の一人娘だったんです。

加藤家から縁談があったのは平塚高女(現・江南高校)を卒業して一年ぐらいたって。最初は真田(平塚市)の叔父の娘のところに加藤家から縁談があったんだけど「これは我が家の娘じゃつとまらない。本家の文子むきだ」って話が回って来たの。父も、「戦争もどうなるかわからない。縁があるところに行つたほうがいいんじゃないか。大人の生活をさせてやりたい」って気持ちがあったみたいね。父は、「とにかく人間は忙しいほうがいい。暇だとなかなか

とは考えないから忙しいほうがいい」って常に言っていました。だから私も忙しいところにお嫁に行くことに決めてたの。結婚する前にスミさん(義祖母)とヤエさん(義母)が二人で私を見に来たの知ってるんです。

私もこの加藤家を見にきたんですよ。小田原の十字町の叔母と二人でね。裏のほうはまだ田んぼがずーつとあって、滑って尻餅ついちゃったんです。したら叔母が「文子、尻餅ついて、きつとここに縁があるんだよ」って。それがもとですよ、私がおこへ来たのは。それでね、主人と三回目に顔を合わせたときは結婚式。だから主人がどんな人かも分からない。

鉄兜ともんぺで新婚旅行

実家のおばあちゃんは私が嫁に来るときは亡くなっていたけど、「文子、お嫁に行く時はお振袖で行くんだね」って二言目(ふたこめ)には楽しみに言っていたんです。そうしたらここに来るころは何にも物がないころで、お振袖どころの騒ぎじゃないですよ。食べるものなくてね。それでも母は一生懸命自分の着物を解いて呉服を作ってくれたの。私は、従姉妹の振袖を借りてお嫁に来た。

二百八十六号(令和八年七月号)

目次

「いいちみそ」が生まれるまでのお話
多古「加藤兵太郎商店」の歴史
話し手 加藤文子さん 1

講演録 小田原史談会 総会講演

北条早雲の伊豆国支配と

小田原への侵攻過程

金子 浩之…………… 6

小田原史談会 令和八年三月「〇と近たび」
花咲く秦野盆地と湧水群をめぐる
諸星 幸雄…………… 22

高田掬泉 文と画

「昭和とはどんな眺めぞ」

発刊予告

松島 俊樹…………… 26

二〇二六年度 年次総会議案書…………… 28

小田原史談会セミナー 告知…………… 20

史談再録…………… 21

新賛助団体紹介…………… 31

新会員紹介…………… 31

会員募集…………… 31

賛助団体・落穂集…………… 32